



① 公益財団法人ダイロン福祉財団の助成を受けて購入した大型の薪割り機。支援を得て、できることが一つずつ増えている ② 昨年はマイアミ浜オートキャンプ場へ薪9000束を届けた。「甲賀木の駅」のとなりには甲賀福祉作業所があり、施設利用者が薪割りに参加する。この日は施設職員徳地雅征さんも一緒に汗を流した ③④⑤ 遊びながら自然と人との関わりを学ぶ「木育」のほか、山を見直してもらうための音楽イベントなどを開催してきた

巻頭特集 甲賀市大原地域

山と人の温もりをつないで

標高800メートルの那須ヶ原山の麓に位置する大原地域。

古くから育林が盛んな地域であり、

「甲賀ヒノキ」の産地として知られてきた。

ところが、生活様式の変化や輸入木材の流通などにより、

地域の林業は成り立たなくなってしまう。

それでも、山を守る活動は続いている。

かつては良質の木材の産地 時代と共に林業は衰退へ

今年6月、第72回全国植樹祭が鹿深夢の森で開かれた。その森から東へ車で1分、眼と鼻の先に「甲賀木の駅」の活動拠点がある。ここでは、山で放りっぱなしになっている木や間伐材を集めて、薪へと加工している。この日は週に2回あるという薪割り作業が行われていた。

甲賀地方はかつて「柚の谷」と呼ばれたほど森林資源の豊かな地域だ。しかし、明治初頭の近代化により、木はエネルギー源として、さらに建築材としても需要が増し、一帯の山は瞬く間に禿山と化した。度重なる鉄砲水に苦しんだ村人は、明治10年頃から植樹を始めたという。「あれが那須ヶ原山ですよ。昔は苗木を担いで山頂付近まで登ったそうです」と、

大原自治振興会の会長・大原久和さんが南東を指して教えてくれた。

植林開始から145年を経たいま、人々の生活様式はさらに変化した。里山で燃料を採集する必要はなくなり、建築にも輸入木材が多く使われるようになった。大原地域のみならず、日本の林業は衰退の一途にある。「木を伐り出し、乾燥させ、流通する。それだけではなく、木を育てるには10年間も下草を刈るなどの手間が掛かります。いま、木にそれだけの価格が付きません」と大原さんは話す。

山の恵みを分かち合い 次の世代へ伝えるために

地域では、那須ヶ原山の西南斜面320ヘクタールを大原財産区有林として管理・運営してきた。次第に管理の行き届かない私有林が増えたため、昭和49

年に有志126名で「甲賀愛林クラブ」を設立。各自の余暇を利用して、私有林や共有林を共同管理してきた。

そして平成26年、森林資源で得た収益を地域で循環させる「木の駅」システムを導入した。当初は伐採した木をチップ工場へ販売していたが、アウトドアブームを機に薪の生産をスタート。収益は、木を伐採した山の持ち主に地域通貨「モリ券」で支払われ、町内の協賛店舗などで使える仕組みとなっている。このほか、山の所有者だけではなく、山と関わりがない人々にも山への関心を持ってもらうと、子どもたちに山と自然の魅力を伝える「木育」、近隣の河川広場を活用したイベントなどを開催している。

地域の当面の課題は、荒れてしまった山の持ち主を見つけること、そして山の境界を明らかにすることだ。「所有者を把握できていない山は多くあります。そこを整備できれば、活用の幅はさらに広がります」と大原さんは先を見据える。



大原自治振興会
会長
大原久和さん